

# 結果構文とテンプレート拡張

奥野浩子

## 0. はじめに

本稿の目的は、英語で基本的には動作しか表さない動詞が、結果構文に生じる場合の意味構造がどのようなもので、どのように派生されるかを明らかにすることである。ここでは、基本的に Rappaport Hovav and Levin (1998)(以下、RH&L(1998)と略記)で提案された枠組みを採用する。彼女たちは、ここで扱うような結果構文は、動詞の意味の基本形である事象構造テンプレート(event structure template)に「テンプレート拡張」(Template Augmentation)という操作を適用して派生する。しかし、彼女たちの提案するテンプレート拡大では扱えない結果構文が存在する。また、テンプレートのリストも不備である。本稿では、テンプレート拡大を再定式化し、テンプレートのリストも提示する。

本稿では、次のような例を結果構文には含めないことにする。

- 1a. The river froze solid.
  - b. The bottle broke open.
  - c. Tom broke the vase into pieces.
- 2a. Mary arrived at the airport.
  - b. He went to the beach.

このような例では、動詞そのものが結果を意味として含んでいる。結果句のように見えるものは、単にその結果状態・結果位置を詳述しているものとする。(Pustejovsky (1991)参照)

したがって、本稿で考察する結果構文に生じる動詞は、基本的には結果を指定せず、動作のみを表すものである。RH&L(1998)は、動作を表す意味構造に結果部分を付け加えることで結果構文を派生することになる。セクション1では、RH&L(1998)が提示した、動詞の意味構造とテンプレート拡張を概観する。セクション2では結果構文に見られる因果関係が、構造の中にかに使役連鎖として表されるかを考える。その過程でテンプレート拡張の修正と、この操作に対する適格性条件が提案される。セクション3では、事象構造テンプレートのリストを示すことになる。

## 1. 動詞の意味構造とテンプレート拡張

RH&L(1998)では、動詞の意味は、その動詞の意味クラスの決定に関わる構造的意味と、その動詞に固有の意味(idiosyncratic meaning)を表す定項(constant)で構成される。彼女たちは、一定の動詞クラスに共通の構造的意味を事象構造テンプレート(event structure template)と呼び、(3)のような例をあげている。事象構造テンプレートという呼称は、このようにして表されるものが、よく知られている事象タイプと一致することによる。

- 3a. activity                    [x ACT <MANNER>]
- b. state                        [x <STATE>]
- c. achievement                [BECOME [x <STATE>]]  
                                  [BECOME [x <PLACE>]]
- d. accomplishment            [[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]  
                                  [[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]]

事象構造テンプレートは動詞の語彙意味を表したもので、ACT, BECOME, CAUSE のような意味述語と<イタリックス>で表される定項で構成される。動詞の固有の意味を表す定項成分がテンプレートに導入されて、具体的な動詞の語彙意味構造＝事象構造が作り出されることになる。たとえば、*run* は特有の様態を表すので <RUN> として ACT の修飾部として具現される。定項は、動詞の独自の意味を指定するものであるから「動詞は定項を語彙化している」ことになる(RH&L (1998: 110)。x や y はテンプレートが認可する変項である。このような変項は、動詞が表す事象の参与者と照合され融合される。*run* では、唯一の参与者である「走者」が ACT の主語(x)と意味的整合性をもつので、x と「走者」が融合される。ここで気づかされるのは、活動動詞のテンプレートに変項が1つしかないことである。このテンプレートは、一項の活動動詞である非能格動詞と結び付くことはすぐにわかるが、二項をとる他動詞の場合には説明が必要である。

他動詞の場合には、事象への参与者が複数存在する。*sweep* の場合には、行為者と接触面の2つの参与者が関わっている。テンプレートには変項が1つしかなく、これは行為者と融合される。この参与者はテンプレートと定項(SWEEP)の両方から認可されることになる。接触面については、定項によってのみ認可される参与者である。つまり、参与者には、テンプレートと定項の両方から認可される「構造的参与者」(structure participant)と、定項によってのみ認可される「定項参与者」(constant participant)の2種類を認めることになる。定項参与者は下線が施される。*sweep* は *run* と同様、独自の様態を表し、行為者と接触面を参与者とするものであるから、事象構造は次のように表される。

- 4. *sweep*: [x ACT <SWEEP> y]

この事象構造を統語で具現化する際の適格性条件として、次のようなものが提案されている。

5. **Subevent Identification Condition**(下位事象同定条件): Each subevent in the event structure must be identified by a lexical head (e.g. a V, an A, or a P) in the syntax.
6. **Argument Realization Condition**(項具現化条件):
  - a. There must be an argument XP in the syntax for each structure participant in the event structure.
  - b. Each argument XP in the syntax must be associated with an identified subevent in the event structure.

*sweep* には 2 通りの項表現が可能であるが、(5)(6)の条件を満たしていることを確認してみよう。

- 7a. Phil swept the floor
- b. Phil swept.

*sweep* の事象構造は単一の下位事象から成り、これが語彙主要部である動詞により表されているため、(7a)(7b)はともに、(5)の下位事象同定条件を満たす。さらに、どちらも構造的参加者が主語に表されていて(6a)の条件を満たしている。(6a)では構造的参加者についての条件は与えられているが、定項参加者についての規定はされていない。定項参加者については、Brisson (1994)の復元可能性条件に従うと仮定されている。

#### 8. **Recoverability Condition:**

A constant participant can be unexpressed if it is understood as "prototypical."

*sweep* は特定の接触面、つまり、床をプロトタイプとする動詞であるから(7b)のように目的語を表出させなくても可能であるということである。

RH&L(1998)の枠組みでは、活動動詞を含む結果構文はテンプレート拡張という操作により派生される。

9. **Template Augmentation:** Event structure templates may be freely augmented up to other possible templates in the basic inventory of event structure templates.

結果構文は、活動動詞のテンプレートを拡張して、すでに事象構造テンプレートのリストに挙げられている達成動詞のテンプレートにすると考えていることになる。

*sweep* のテンプレートを拡張して、位置変化を表す場合を考えてみよう。

10. [[x ACT <SWEEP> y] CAUSE [BECOME [z <PLACE>]]]

- 11a. Phil swept the crumbs into the floor.  
 b. Phil swept the crumbs off the table.

テンプレート拡張で得られた(10)の構造は 2 つの下位事象からなる複合構造である。下位事象はそれぞれ動詞と前置詞という語彙主要部で表されているので(5)の下位事象同定条件を満たしている。また、構造的参与者である x と z がそれぞれ、*Phil, the crumbs* という NP で表されていて(6b)の条件が満たされている。こうして、(11)のような文法的な結果構文が派生される。

## 2. 使役連鎖と事象構造

結果構文では、動詞で表される行為の結果の状態変化や位置変化が表される。(10)の構造では、x が y に働きかけた結果 z の位置変化が起こったことが表されている。しかし、最も自然な結果構文は、x が y に働きかけ、その結果 y が変化を被るという使役連鎖(causal chain)が表されている場合である。x が y に働きかけた結果、無関係の z が変化するということは考えにくい。もう一度(11)の例をよく考えてみると、y と z は無関係に存在するのではなく、密接な関係にある。働きかけを受けたのは接触面(y)であるが、位置変化をうけた z は y と接触していたと考えられ、したがって z も y と一緒に働きかけを受けたといえる。y と z が全くの別物である場合には、結果構文では表現できない。たとえば、母親が部屋を掃除するというので息子が部屋から出ていったという状況を、次のように表現することはできない。

12. His mother swept him out of the room.

以下では、テンプレート拡張によるさまざまな結果構文のどの場合にも、使役連鎖が形成されることをみていく。まず、使役連鎖が自明である、働きかけを受けたものが変化する場合を見てみよう。状態変化の例が(13)で、位置変化の例が(14)である。

- 13a. She was wiping the mirror free of steam. (RH&L 1999: 17)  
 b. They rubbed their children's hair dry. (*Ibid.*)  
 c. Fido chewed my shoes to tatters. (Carrier & Randall 1992: 215)  
 d. The mother rocked the baby to sleep. (L&RH 1999: (2b))
- 14a. Kim pushed the stroller into the store. (LRH 1996: 498)  
 b. Peter pulled the books out of the package. (*Ibid.*)  
 c. Sue dragged the sack into the office. (Pesetsky 1995: 139)  
 d. the band that they hooted the members of off the state (Carrier & Randall 1992:207)

この場合の構造は次のようになる。

- 15a. [x ACT <MANNER> y ] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]  
 b. [x ACT <MANNER> y ] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]

ここで、使役連鎖を構造からみると、CAUSE の第 1 項（原因項）と第 2 項（結果項）に同じ変項 y が含まれていることになる。

次は、働きかけを受けたものが変化するのではなく、それと密接な関係にあるものの変化を表す場合である。その変化が場所変化である場合については(11)にあげたが、そのうち(11b)は Levin & Rappaport Hovav (1995)が wash 文と呼んだものである。類例をあげてみよう。

- 16a. Leslie wiped the cloth over the table. (RH&L 1999: 15)  
 b. He washed the soap out of his eyes. (Hoekstra 1988: 116)  
 c. He rubbed the tiredness out of his eyes. (*Ibid.*)  
 d. Kelly broke the branch off the tree. (RH&L 1998: 123)

このような例では、通常の動詞の目的語が前置詞句に生じている。(16a)ではテーブルが拭かれたのであり、(16b)では目を洗ったのである。これを次のように、場所項に定項参与者と同じインデックスを付与して表すことにする。また、y と z は接触して一体化していると考えられるので z にもインデックスを付与する。

17. [x ACT <MANNER> y ] CAUSE [BECOME [zy <PLACE<sub>y</sub>>]]

ここでも原因項と結果項に同じ y が生じていて、使役連鎖がはっきりと表されている。(16)と平行的な状態変化の例とその構造を以下にあげてみよう。

- 18a. Cinderella scrubbed her hands raw. (L&RH 1999 (7a))  
 b. Leslie scrubbed her knees sore. (RH&L 1999: 15)  
 c. The gardener watered his sneakers soggy. (Carrier & Randall 1992: 187)  
 d. They drank the pub dry. (RH&L 1999: 19)  
 e. The teapot was drunk dry by the thirsty workers. (L&RH 1995: 44)  
 f. The cattle ate the field bare. (RH&L 1996 (1e))  
 g. The chef cooked the kitchen walls black. (Carrier & Randall 1992: 184)
19. [x ACT <MANNER> y ] CAUSE [BECOME [zy <STATE>]]

働きかけを受ける y と変化の主体である z の関係は(18a-c)では接触である。(18a)ではシンデレラが

手に雑巾をもって床をごしごし磨いたことが考えられる。この場合、床と雑巾の接触だけでなく床と彼女の手との接触もある。(18c)でも、花に水をやる時に花と庭師のスニーカーはほぼ接触していると見なすことができる。(18d-g)では両者の関係は包含関係であると考えられる。(18d)ではパブとそこにあるアルコール、(18f)では草原とそこにある牧草、(18g)ではシェフと調理場という包含関係である。ここでも、y と z の一体化を捉えるために z にインデックスを付与することにより、使役連鎖を構造に表すことができる。

今度は、フェイクな目的語を含む例である。まず、行為者が自らの行為により状態変化を受ける例である。

20a. Tom talked himself hoarse.

b. Mary laughed herself silly.

21. [x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [x <STATE>]]

ここにも使役連鎖が表されている。再帰代名詞の出現は、結果事象の中の構造的参与者を統語に表出しなければならないという、項具現化条件の要請によるものである。今度は、ある行為により動作主でない何かに変化したことが表されている例である。

22a. The professor lectured the class into a stupor. (Carrier & Randall 1992: 215)

b. He sang us all to sleep. (L&RH 1999 (4b))

c. The clock ticked the baby awake. (L&RH 1995: 67)

d. Drive your engine clean. (L&RH 1995: 37)

e. Sleep your wrinkles away. (L&RH 1995: 36)

f. He sneezed his handkerchief completely soggy. (Carrier & Randall 1992: 173)

23. [x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]

ここでは働きかけを受けての変化ではない。ここでの変化主体は、x の行為から推論で働きかけを受けると解釈されるものである。その行為が成立する時に関わっているものの変化が述べられている。そして、この場合の変化は状態変化であるが、直接的な働きかけを受けないで位置変化をすることはありえないため、次のような結果構文は不可能である<sup>1</sup>。

24a. \*The ball bounced the markings off the floor. (L&RH 1992: 256)

b.??The wagon rolled the rubber off its wheels. (RH&L 1999:22)

このような例の構造については後で論じることにする。

次の例では、状態変化と位置変化の両方が述べられていて、一見したところ Goldberg(1991)の一義的経路の制約(Unique Path Constraint)に違反しているように思われる。

- 25a. The chocolate melted into the sofa. (RH&L 1999: 8)
- b. The branding iron burned into the calf's skin. (Croft 1991: 161)
- c. I melted the name off the mailbox with a hair dryer. (L&RH 1992: 256)
- d. We broke the walnuts into the bowl. (Goldberg 1991: 376)
- e. The cook cracked the egg into the glass. (L&RH 1995: 60)
- f. Daphne shelled the peas onto the plate. (*Ibid.*)

用いられている動詞は、それ自体が状態変化を表すものである。これにさらに、位置変化の表現が付け加えられている。同一のものについて、2つの変化を述べることはできないというのが一義的経路の制約である。しかし、よく考えると状態変化をうけたものと位置変化を受けたものは「同一」ではないことがわかる。(25a)では、固形のチョコレートが溶けたという状態変化とその溶けたチョコが位置変化をしたことが述べられている。(25d)では、クルミの殻が割られてその中の実をボウルに入れたのである。(25e)でも、卵が割られてその中身がコップに入ったということが表されている。つまり、全体と部分に同じ名前が用いられているのであって、同一のものではないのである。全体と部分が同一名で示されない場合には、一義的経路の制約に違反し非文になるし(26a-c)、別々のものにそれぞれ状態変化と位置変化を叙述することも許されない(26d-f)。

- 26a. \*I broke the mirror into the garbage pail. (L&RH 1995: 61)
- b. \*The bears frightened the campground empty. (Carrier & Randall 1992: 187)
- c. \*The psychopath killed the village into a ghosttown. (Hoekstra 1992: 161)
- d. \*The ice melted the floor clean. (RH&L 1999: 21)
- e. \*The bomb exploded the watermelons into the air. (RH&L 1999: 21)
- f. \*The water evaporated the pot dry. (*Ibid.*)

(26b)では、クマがキャンパーたちを驚かせて、キャンパーたちが逃げ出したためにキャンプ場に人がいなくなった状況であるが、*campground* でキャンプ場は表せてもキャンパーを表すことはできない。(26e)では、爆弾が爆発するという状態変化と、スイカが空中に吹き飛んだという位置変化が同時に表されている。

(25)の例が表す2つの変化は状態変化が先で位置変化が後である。その状態変化は動詞自体が指定するものである。つまり、状態変化の部分は達成動詞の構造をもつ(自動詞用法でも他動詞用法でも同じ構造と仮定する)。RH&L(1998)のテンプレート拡張では、達成動詞のテンプレートが最も複

雑な構造をしており、さらに拡張することは許されないことになる。しかし、実際に(25)のような可能な文を説明するためには次のような構造を仮定しなければならない。

27. [EVENT 1[x ACT y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] CAUSE [EVENT 2 BECOME [y' <PLACE>]]

CAUSE が2つ含まれているが、いずれも使役連鎖を形成していることがわかる。1番目の CAUSE は原因項にも結果項にも y を含む。この[原因-CAUSE-結果]を原因項とする2番目の CAUSE の結果項には y の部分を表す y'が生じていて使役連鎖が形成されているとみなされる。たとえば、(25d)では、動詞 *break* の構造が(27)で EVENT 1 として表された部分で、主語「私たち」(x)がクルミ(y)を割ったことが示される。その結果がテンプレート拡張により付け足された EVENT 2 の部分で、クルミの実(y')の位置が変化したことを表している。このような複合構造の場合、下位事象同定条件に関わるのは、EVENT 1 と EVENT 2 である。EVENT 1 は動詞で、EVENT 2 は前置詞で表されていて条件を満たしている。また、構造的参与者である y と y'は同一の名前をもつのであるから、どちらも統語に表され、項具現化条件も満たしている。

(25)とは変化の順序が反対の、位置変化により状態変化がもたらされる例としては、所格交替があげられる。(28)の交替の例を構造で示すと(29)のようになる。

28a. The farmer loaded apples onto the cart.

b. The farmer loaded the cart with apples.

29a. [x ACT <MANNER> y] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]

b. [EVENT 1[x ACT <MANNER> y ] CAUSE [BECOME [y <PLACE>z]] CAUSE

[EVENT 2 BECOME [z <STATE>]]

所格交替のペアのうち、主題を目的語にとる(28a)では、りんごに *load* という働きかけをして、りんごの位置を変えることが表されている。場所を目的語にとる(28b)ではりんご(y)の移動による荷車(z)の状態変化が表される。1番目の CAUSE は原因項にも結果項にも y を含んでいて、2番目の CAUSE では原因項である EVENT 1 にも結果項である EVENT 2 にも z が含まれていて、使役連鎖が表されている。この場合にも、下位事象同定条件も項具現化条件も満たしている。

このように考えると、テンプレート拡張は達成動詞のテンプレートを最大とするのではなく、テンプレートのリストの中から2つを組み合わせる操作であると見なす必要がある。そこで、ひとまずテンプレート拡張を次のように修正するように提案する。

30. **Template Augmentation (Tentative):** Two distinct event structure templates may be combined to form



a complex event structure.

この拡張操作により派生された事象構造に対しては、使役連鎖がなくてはならないという適格性条件が課せられる。しかし、これまで見てきたように、使役連鎖が構造に明示的に表される場合だけでなく、(23)でみたように推論による場合もある。したがって、この条件は次のように表される。

31. **A Well-formedness Condition on Template Augmentation:** A derived structure must express causal chains structurally or pragmatically.

テンプレート拡張とそれに対する適格性条件を示したところで、次の課題は、事象構造テンプレートのリストはどのようなものであるかを示すことである。

### 3. 事象構造テンプレート

RH&L(1998)は、達成動詞のテンプレートとして、次のようなものを提示した。

32. [[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (=3d)

しかし、この構造には問題がある。L&RH (1991)や RH&L(1998)で繰り返し主張されてきた、「結果」と「様態」の相補性を無視していることである。L&RH(1991)や RH&L(1998)では、例外的に結果も様態も指定する動詞として cut があると指摘されているが、結果と様態の二分法は原則的に正しいと仮定されている。したがって、達成動詞の構造(32)から <MANNER> を取り外さなければならない。また、状態変化は直接的な働きかけによるものであるから ACT 述語に第 2 項の y も必要である。この y が構造的参与者であるか定項参与者であるかは、検証する必要があるが、ここでは構造的参与者であると仮定しておく。以下では(3d)の構造は採らず、(33)を達成動詞の構造と仮定することにする。

33a. [[x ACT y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]

b. [[x ACT y] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]]

(33b)は位置変化を表すものであるが、位置変化が引き起こされる場合には、pull のように使役主が移動物に随伴する場合と throw のように使役主が最初のきっかけを与えるだけで移動物が移動する場合とがある。この区別は McCawley(1976)が指摘した継続的使役(continuous causation)と衝撃使役(ballistic causation)に対応するものである。この区別が関わる言語現象がいくつかあるので見てみよう。まず、in や on の解釈に違いがある。衝撃使役では方向と場所の解釈で曖昧であるが、継続的使役では場所の解釈しかない(Pesetsky 1995)。

- 34a. Mary threw the book in the room.  
 b. Mary kicked the ball on the field.
- 35a. Mary pulled the trunk on the mat.  
 b. Mary lowered the balloon on the runaway.

つまり、(34)のような衝撃使役では *into* や *onto* の代わりにも使用できるということである。また、Pesetsky(1995)や Pinker(1989)によると、衝撃使役は与格交替が可能であるが継続的使役では不可能である。

- 36a. Mary threw the book to John.  
 b. Mary threw John the book.
- 37a. Mary pulled the trunk to Sue.  
 b. \*Mary pulled Sue the trunk.

このような、ものの移動が継続的使役によるものであるか衝撃使役によるものであるかによる差を捉えるために、それぞれを意味述語 BECOME と MOVE で表すことにする(影山 1996)。(33b)の構造は継続的使役による、ものの位置変化を表すものと考えことにする。

[ACT-CAUSE-MOVE]と表される、同じ衝撃使役でも、*throw* と *roll* では使役交替の可能性が異なる。この差は <MANNER> を一方は ACT に他方は MOVE につけることで捉えることができると思われる。すなわち、一定の様態で働きかけるということはその背後に動作主の存在があり、この動作主をはずして自動詞用法は得られないと考えるのである。これに対し、一定の様態で移動することはその移動主体の性質によるものであるから自動詞用法が可能であることになる。構造を表すと、継続的使役は(33b)で表され、衝撃使役の *throw* と *roll* はそれぞれ(38a)(38b)のように表される。

- 38a. throw: [x ACT <THROW> y] CAUSE [y MOVE <PATH>]  
 b. roll: [x ACT y] CAUSE [y MOVE <ROLL> <PATH>]

結果構文の中で、MOVE を構造に含むものとしては次のようなものがあるが、いずれも使役連鎖を形成している。さらに、下位事象同定条件も項具現化条件も満たしている。

39. The lumberjack rolled the bark off the log. (L&RH 1992: 256)  
 [[x ACT y] CAUSE [y MOVE<ROLL> <PATH>]] CAUSE [BECOME [zy <PLACEy>]]
40. He sprayed the wall with paint.  
 [[x ACT y] CAUSE [y MOVE<SPRAY> <PATHz>]] CAUSE [BECOME [z <STATE>]]

(39)では、まず、きこり(x)が丸太(y)に力を加えた結果、丸太がころがり、ころがっているうちに丸太から皮(z)がはがれたことが表されている。働きかけを受けたものと接触して一体化しているものが位置変化をしている点で、(16)であげた wash 文と似ている。(40)は、load と同じ所格交替動詞 spray が用いられているが、load とは違って spray の場合は、roll と同様に衝撃使役が関わっている。彼(x)が何らかの操作をするだけでペンキ(y)は霧状になってスプレーヤーから出て壁に付着していく。wash 文や load では、結果事象に BECOME が生じたが、(39)(40)では MOVE が生じている。

(24)で、直接的な働きかけを受けない位置変化は不可能である例をあげた。そこで用いられた動詞は roll クラスの動詞であった。その構造を示すと以下ようになる。

41. \*[x MOVE<MANNER> <PATH>] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]

構造からも使役連鎖は見られないし、物理的な位置変化には直接的な働きかけが不可欠であることから、このような構造は不可能であると考えられる。

使役交替動詞である roll の構造を(38b)のように移動の様態を表すものと仮定すると、同じく移動様態動詞として分類されてきた run, swim, walk のような動詞の構造をどう扱うかが問題になる。影山・由本(1997)では、roll クラスと run クラスを区別することが提案されている。これまで同じ意味クラスの動詞として扱われてきたが、roll クラスは使役交替が可能であるのに対し、run クラスでは通常、これが不可能である。移動を表す動詞の使役交替可能性を、MOVE<MANNER> を含むかどうかで捉えたとすると、run クラスにはこれが含まれないことになる。影山・由本にならって、run クラスの動詞が表す様態は、移動を引き起こす原動力となる身体動作 ACT の様態であると考え、このクラスの構造は次のように表される。

42. [x ACT<MANNER>] CAUSE [x MOVE <PATH>]

この構造は2つの下位事象を含む使役構造であるが、ACT と MOVE は同一主体により同時におこなわれるものである。このような場合、つまり、[ACT<MANNER>-CAUSE-MOVE]の構造を含み、ACT と MOVE の主語が同じ場合には、L&RH(1999)が提案する事象単一化(event coidentification)により次のような単純構造になると仮定する。

43. [x ACT<MANNER> MOVE <PATH>]

この構造は、x 自身の移動推進動作による移動を表すもので、run to the station のような表現の他に次のような文の構造を示すものである。

- 44a. Pat ran clear of the falling rocks. (RH&L 1998: 98)
- b. She sprinted free of her captors. (L&RH 1996: 499)
- c. ... if fire is an immediate danger, you must jump clear of the vehicle. (*Ibid.*)

(42)の構造では、下位事象が2つありそれぞれが構造的参加者を含んでいるため、項具現化条件を満たすには、再帰代名詞が出現することになるが、移動推進動作を表す動詞は再帰代名詞をとらない。事象単一化をすると、下位事象は1つで構造的参加者も1つになり、適格な統語構造に結びつくことになる。

以上のことから、事象構造テンプレートのリストには次のようなものが含まれることになる。

- 45a. [x ACT<MANNER>]
- b. [x ACT<MANNER>] CAUSE [x MOVE <PATH>]
- c. [x <STATE>/ <PLACE>]
- d. [BECOME [x <STATE>/ <PLACE>]]
- e. [x ACT y] CAUSE [y MOVE <MANNER> <PATH>]
- f. [x ACT<MANNER> y] CAUSE [y MOVE <PATH>]
- g. [x ACT y] CAUSE [BECOME [y <STATE>/ <PLACE>]]

本稿では、テンプレートのリストの中から2つを組み合わせるというテンプレート拡張の操作によって、結果構文が派生されることを論じてきた。これまで見てきたテンプレート拡張による構造をあげてみよう。

- 46a. [x ACT <MANNER> y] CAUSE [BECOME [y <STATE>/ <PLACE>]]
- b. [x ACT <MANNER> y] CAUSE [BECOME [zy <STATE>/ <PLACE>]]
- c. [x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [x <STATE>]]
- d. [x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]
- e. [x ACT y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]] CAUSE [BECOME [y' <PLACE>]]
- f. [[x ACT <MANNER> y] CAUSE [BECOME [y <PLACE<sub>z</sub>>]]] CAUSE [BECOME [z <STATE>]]
- g. [[x ACT y] CAUSE [y MOVE <MANNER> <PATH>]] CAUSE [BECOME [z <PLACE<sub>y</sub>>]]

(46a-d)は、(45a)に(45d)を付け加えた構造になっている。(46e)は、(45g)と(45d)を合わせた構造である。(46f)は(45g)と(45d)を組み合わせている。(46g)は、(45e)と(45d)の組み合わせである。そして、(46d)を除けば、すべての構造で使役連鎖が見られる。

ここで、次のような文を考えてみよう。

47. Mary kicked the ball onto the field. (Pesetsky 1995: 139)

メアリがボールを蹴って、その結果、ボールが原っぱに転がっていったことを表している。kick は、ボールの動きに対して衝撃使役を表す。そこで、構造は次のようになる。

48. [x ACT <KICK> y] CAUSE [y MOVE <PATH>]

この構造は *throw* と同じであるが、*throw* の場合には必ず物体の移動を伴うが、*kick* は必ずしも移動を含まないので、*kick* は基本的には(45a)の活動動詞の構造を持つ。したがって、(48)の構造はテンプレート拡張によるものと考えなければならない。この構造は、(45a)から、すでにリストにある(45b)の構造に拡張したもので、(45a)と他の構造を組み合わせたものではない。そうすると、テンプレート拡張は、RH&L(1998)のオリジナルのもの(30)で提案した暫定案を組み入れて次のようにしなければならない。

49. **Template Augmentation (Revised):** Event structure templates may be freely augmented up to other possible templates in the basic inventory of event structure templates, or two distinct event structure templates may be combined to form a complex event structure.

最後に、次のような文を考えてみよう。

50a. Sam cut himself free. (Goldberg 1995: 194)

b. Smitty cut himself loose. (*Ibid.*)

Goldberg によると、このような文では主語が自分自身を切りつけて逃がしてもらったという解釈はなく、ロープか何か彼を拘束しているものを切って自由の身になったことを表す。そうすると、ロープが「切られた」という状態変化を受けることにより、切った側の状態・位置変化がもたらされたことになる。先に述べたように、*cut* は状態も結果も語彙化している動詞であるとする、構造は次のようになる。

51. *cut*: [x ACT<CUT> y] CAUSE [BECOME [y <CUT>]]

この構造に x の変化を付け加えて拡張すると、(52)のようになる。x と y は接触しているのだから、インデックスをふって一体化を表す。ここでも、使役連鎖が構造に表されている。ここで、構造的参与者である y が統語に表されていないことで、項具現化条件が問題になる。しかし、結果事象で、y がインデックスとしてふられている x が、再帰代名詞として表されていることで条件は

満たしていると考えることができる。

52. [[x ACT<CUT> y] CAUSE [BECOME [y <CUT>]]] CAUSE [BECOME [xy <STATE>]]

次のように道具が表されたり、切る側と逃げる側が同一でない例もある。

53a. He cut himself free with his knife. (Genius English Japanese Dictionary)

b. I passed out, but they managed to cut me free. (COBUILD on CD-ROM)

c. A man darted and dodged through the black smoke, trying to cut the horse free. (*Ibid.*)

(53a)の道具の表出は、(52)の構造の様態定項を手段表現として具現されたものと考えられる。(53b,c)は、(52)に変項 z の変化を付け加えたものであるが、この z は y と接触しているものであるのでインデックスが付与され、やはり、使役連鎖が保証される。

54. [[x ACT<CUT> y] CAUSE [BECOME [y <CUT>]]] CAUSE [BECOME [zy <STATE>]]

#### 4. 結語

本稿では、RH&L(1998)で提示されたテンプレート拡張という操作を修正して、英語の結果構文の派生を考えてきた。結果構文には使役連鎖が必要であるが、この使役連鎖をインデックスを用いて明示することができた。さらに、インデックスを用いることにより、項具現化条件への違反のように思える構造に違反がないと論じることができた。しかし、未解決の問題もある。たとえば、次のような文に説明が与えられない。

55. A bantam chick kicks free from its shell. (L&RH 1999 (39a))

[x ACT <KICK> y] CAUSE [BECOME [xy <PLACEy>]]

ここで、結果事象の構造的参与者 x が統語に再帰代名詞として表されていない。L&RH によると、再帰代名詞で表されても可能である。

56. ...They ... watched a duckling kick itself free of its shell. (L&RH 1999 (39b))

このようなデータの検討は今後の課題にする。

#### 注

1. RH&L(1999)では(24a)の文法性を??としている。全く非文法的にならないのは、床の上のマーキングとポー

ルとが断続的に接触することに関係があるかもしれない。接触した時が、マーキングとボールの一体化と捉えるなら、使役連鎖が作られる。(24b)でも、車輪はワゴンの部分であり、さらにゴムタイヤは車輪の一部であることを考えると、ワゴンが動くとき車輪・ゴムタイヤも一緒に動くことになり、使役連鎖が感じられるのかもしれない。しかし、それでも全く文法的とはならない理由は、現時点ではわからない。

2. 次の例では、位置変化が先で状態変化が後であるように思われる。

(i) I emptied the tank into the sink. (L&RH 1995: 61)

しかし、ここでは *the tank* は容器も内容物も表しているのではなく、内容物しか表さず、したがって、*empty* も「状態変化」を表すのではなく「除去」を表すものであると考える。

## 参考文献

- Brisson, Christine (1994) "The licensing of unexpressed objects in English verbs," *CLS* 30-1, 90-102.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The argument structure and syntactic structure of resultatives," *LI* 23-2, 173-234.
- Croft, William A. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, Chicago, University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (1991) "It can't go down the chimney up: Paths and the English resultative," *BLS* 17, 368-378.
- Goldberg, Adele E. (1995) *A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.
- Hoekstra, Teun (1988) "Small clause results," *Lingua* 74, 101-139.
- Hoekstra, Teun (1992) "Aspect and theta-theory," Roca, I.M. (ed.) *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Berlin, Foris, 145-174.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京、くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』東京、研究社
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1991) "Wiping the slate clean: A lexical semantic exploration," *Cognition* 41, 123-151.
- Levin Beth and Malka Rappaport Hovav (1992) "The lexical semantics of verbs of motion," Roca, I.M. (ed.) *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Berlin, Foris, 247-269.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge, MA, MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1996) "Lexical semantics and syntactic structure," Lappin, Shalom (ed.) *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, Blackwell, 487-507.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1999) "Two types for compositionally derived events," *Proceedings of SALT 9*, Cornell Linguistics Circle Publications, 199-223.
- McCawley, James D. (1976) "Remarks on what can cause what," Shibatani, Masayoshi (ed.) *Syntax and Semantics* 6, New York, Academic Press, 117-129.
- Okuno, Koko (1998) "Manner components in locative alternation and causative alternation," *Studies in Humanities* 33-3, Faculty of Humanities, Hirosaki University, 1-21.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax*, Cambridge, MA, MIT Press.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition*, Cambridge, MA, MIT Press.
- Pustejovsky, James (1991) "The syntax of event structure," *Cognition* 41, 47-81.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1996) "Two types of derived accomplishments," *Proceedings of the First LFG Conference*, 375-388.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) "Building verb meanings," Butt, Miriam and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, Center for the Study of Language and Information, Stanford, California, 97-133.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1999) "A Reevaluation of The Direct Object Restriction on English Resultatives," unpublished ms., Bar Ilan University and Northwestern University, Ramat Gan, Israel and Evanston, IL.